

特集「北東アジアの民族と漁撈」

柳田国男にとつての北方文化

—サケをめぐる民俗の看過の問題から—

菅 豊

(北海道大学)

一、はじめに

サケは、漁撈技術にとどまらず社会組織や口承文芸、信仰など、多様な民俗に大きく影響を与えてきた動物である。サケのもつ民俗文化への規定力、影響力は、日本の魚類の中にあつて随一といつても過言ではない。しかし、サケをめぐる民俗文化への関心は、日本民俗学においてあまり活発であつたとはいえず、おおかた資料収集と断片の記述の段階にとどまり、体系的な研究は従来なされてこなかつた。この状況は、日本民俗学で、北方文化を積極的に取り上げてこなかつた状況と、軌を一にしていると筆者は考へて

いる。

民俗学からのサケをめぐる民俗への関心は、やはり柳田国男に始まる。ただし、それは柳田の関心のほんの一部分に過ぎない。柳田の広大な知識の断片なのであるから、その民俗は柳田民俗学にとつてとりたてて取り上げるべきほどのものではないのかもしれない。しかし、柳田のサケ民俗の研究史を注視すると、実はサケをめぐる民俗の軽視が、柳田民俗学の発展と大きく関わっていたことに気づかされるのである。

二、サケに近づく柳田国男

一九一三年(大正二)二月五日付で、

柳田が南方熊楠に宛てた書簡の中に「フレエザーの三版第二(?)巻の中なかに、米土人等鮭を二子と関係あるもののごとく信ずること見ゆ。このこと日本にも類型あるがごとくに候。何かのおついでに御蘊蓄を御発表下されたく、小生も少しく書き申したく候」な「飯倉一九七六三二三」とあり、フレエザーの『金枝篇』の中に登場するアメリカのネイティブの事例と、日本の事例とが類似することに柳田はまず興味を覚えた。同年に刊行が開された『郷土研究』の一卷八号には「箱石と笈の塚」な「柳田一九一三」の小文を掲載し、そこで巫女と石の関係性について述べる中で、サケの遡上に呪力をもつ巫女の石の事例を『和賀稗貫二郡志』から引用している。この頃の柳田のサケ民俗に関する知識は、書物からの情報に頼つていたようである。

前掲の書簡にある「小生も少しく書き申したく候」という言葉は、下ること三年後、一九一六年(大正五)に『郷土研

究」四巻七号誌上に発表された「鮭と兄弟」と「柳田（山崎）一九一六」と題する小論で実現する。柳田はその中で、陸奥三戸郡湊村（現青森県八戸市）の大祐神社に伝わるサケの伝承に注目している。それは、かつてこの地に犬房丸大祐が落ちのびてきた時、又次郎、長才の兄弟がサケ漁をもって養い、それ故サケの頭を叩く時に「千魚又次郎、八百長才」の呪言を唱えるというものである。南方へ宛てた書簡の中に「米土人等鮭を二子と関係あるものごとく信ずること見ゆ。このこと日本にも類型あるがごとくに候」とあるが、この双子に関する日本の類例が、又次郎、長才の兄弟にまつわる伝承であった。柳田はこの例も、加藤拙堂著「日本宗教風俗誌」から仕入れたことを述べている。

この時期、ようやく柳田のまわりにフィールドからのサケの民俗に関する情報が集まり始める。前年の「郷土研究」三巻二号で、吉原春園が「下総小見川の話」

た。しかし、当時において画期的な視点というものが、逆にこの民俗事象のその後の究明を遅滞させたと筆者は考える。中山太郎の学風に対しては平山和彦が綿密な検討を行っている。その中で、中山が日本民俗の源流を他民族に求める傾向があったこと、「トーテムズム」などの外国製の学術用語、概念を積極的に取り入れたことを指摘し、その他様々な学風の特異性から柳田と離反していく、また柳田から遠ざけられていく状況を明らかにしている「平山一九七九」。このような現実的な情勢が、サケ民俗の研究の流れに少なからず、影を落としているのである。

先にも述べたように、サケにまつわる民俗は北方文化との脈絡で理解されうる。この点については中山に指摘されるまでもなく、既に柳田本人が気づいていた。そのことは、南方熊楠に宛てた書簡をみれば明らかである。当初は、この問題に関して興味を抱いていたが、その後柳田

「吉原一九一五」と題して、千葉県香取郡山倉村（現香取郡山田町）の山倉神社のサケ供物の事例を報告したの端を発し、一九一六年（大正五）に「郷土研究」四巻六号では、胡桃沢勘内（平瀬麦雨）

「鮭を忌む神」「胡桃沢（平瀬）一九一六」、羽柴雄輔「オースケコースケ」「羽柴一九一六」というサケ伝承に関する二編が掲載された。これを受けて先に紹介した「郷土研究」四巻七号の柳田の小論が発表されるわけである。次ぐ「郷土研究」四巻八号でも、中山太郎（岩井田作太郎）「鮭神について」「中山（岩井田）一九一六」、田口松圃「鮭神とエビス」「田口一九一六」の二編が掲載されることとなる。いずれも短い報文で論考と呼ぶのも憚られるが、柳田が主宰した雑誌「郷土研究」誌上において、三号に連続してサケの民俗の記事が取り上げられたことは注目しておいてもよいであろう。しかし、その後サケの民俗に関して柳田、及び「郷土研究」への情報提供者らの関心

の民俗学が形成される中で、日本文化の北方性という観点をむしろ排除していくのである。佐伯有清は柳田の「一国民俗学の確立」、つまり日本民俗学の樹立の過程で、当初情熱をもって吸収していたフレイザーの言説を、徐々に批判的に取り扱うようになる推移を明示している「佐伯一九八八・一八六―二一五」。これはサケの民俗に関して同様にいえることで、当初は南方へ情報を求めるほど興味をもったフレイザーの一節に対し、後には批判の矛先を向けるようになる。一九三三年（昭和八）に発表された「忌と物忌の話」には、その態度の変貌ぶりを示す重要な見解が書き記されている。

「…先祖が海に漂流して鮭の魚の背に載せられて戻って来た。だから決して鮭は食はぬといふ伝説もある。トテムといふ語をよくも考へずに使はうとする人は、何かといふと斯ういふ一つ話を引くのである。」

は薄らいでいく。

三、サケから遠ざかる柳田国男

柳田は、大正中頃から末にかけて執筆したと思われる未刊の『山島民譚集（二）』「柳田 年不詳」において、石川県能登の聖とサケの民俗を取り上げていたが、これとて「能登名跡志」などの書物からの引用で、事例的にもそれほど重要性をもって扱われていない。

柳田に情報を提供した者のうち、ただひとり中山太郎のみが「気多神考」「中山一九二四」という石川県気多神社にまつわるサケの論考を発表する。これはサケの信仰の研究に先鞭をつけたもので、「鮭神信仰」をトーテムズムに由来した魚類崇拜と位置づけた点において特徴がある。サケの神と気多神の関係を、ロシア語のケタ（サケの意味）に求めている点は、それ自体首肯できうるものではないが、背後にいわんと欲する、北方文化と日本文化とのサケ民俗の関連に対する視点と事例の集積度は、当時では画期的であっ

実際この東北の鮭に助けられた話や、鮭と共に祀られて居る先祖の兄弟の話などを見るとよほど北米の土人の間に存するトテムの信仰と似て居る。フレイザー先生などのトテム考には、此程度の事実が有れば、トテム信仰の昔あつた痕跡だと認めて居られる。しかしそれは今後の興味ある研究問題といふのみで、今はまだ少しでも画定した事実でも何でもない。斯んな外国の名前などには囚はれず、やはり日本では日本の事を明らかにしてかゝるが順序である。」「柳田一九三三・三一六―三一七」

どうであろう、この辛辣な言葉は、「トテムといふ語をよくも考へずに使はうとする人」とは、中山太郎ひとりではなくとも、彼がその範疇に含められていたことはほぼ異存あるまい。フレイザーもここでは形無しである。昭和初期の柳田民俗学の体系化の過程で、安易な外国の概念の導入を戒めていた柳田としては当然の見解であろう。

実は、「トテム」といふ語をよくも考へずに使はうとする人」という表現は、もうひとり別の人物に向けられていた。それは、他ならぬ「先祖が海に漂流して鮭の魚の背に載せられて戻つて来た。だから決して鮭は食はぬといふ伝説」を柳田にもたらしめた情報提供者、佐々木喜善その人であった。柳田がこの伝説を手に入れた経緯について、若干説明しよう。

柳田は、「遠野物語」を刊行した後、その増訂版を目論む中で、佐々木喜善に追補の資料を請求し、それに佐々木は応えて、フィールド・ノートを原稿用紙に清書し柳田に託した。その資料の中に、その伝説はあった。柳田はそれらの資料に依拠し増訂版を編む作業の途についていたが、それは遅々として一向に進まず、それに待てなくなった佐々木は一九三一年(昭和六)自ら昔話集「聴耳草紙」(佐々木一九三二)を刊行することとなる。その中には、柳田のもとに託していた口碑類が取り入れてあった。柳田は自分が遠

野物語の拾遺として出そうと思つていたものが、佐々木によって先に発表されてしまったため拍子抜けし、元々遅れがちであった増訂作業は益々遅れ、ようやく「遠野物語拾遺」が日の目をみたのは、佐々木喜善の死後の一九三五年(昭和一〇)のことであった。しかもこれは柳田が自ら携わつたのではなく、鈴木脩一に編集を委せたものであった。

この「遠野物語拾遺」には、一三八番から一四一番にかけて遠野の宮家に伝わるサケの言い伝えが取り上げられている。「柳田一九三五・一三〇—一三一」。この話は佐々木の「聴耳草紙」に既に収められていたのである。佐々木は九七番から九九番でサケの口承文芸を取り扱っている。そのうち九九番の遠野・宮家に伝わる話が、「遠野物語拾遺」一三八番から一四一番に相当する話で、「先祖が海に漂流して鮭の魚の背に載せられて戻つて来た。だから決して鮭は食はぬといふ伝説」なのであった。実は、この九九番目の話に、

佐々木喜善は「九九番 鮭魚のとをてむ」と、題を付しているのである。「九九番 鮭魚のとをてむ」には、このタイトル以外「トーテムズム」に関する記述は全くないが、この一点をもって佐々木は、「トテム」といふ語をよくも考へずに使はうとする人」に含められてしまったのである。この頃、柳田は昭和初頭の「魚王行乞譚」(柳田一九三〇)、「狼と鍛冶屋の姥」(柳田一九三二)、「猿地蔵考」(柳田一九三六)などの論考で、サケの民俗をごく僅かに利用するにとどまり、以後、民俗を読み解く素材として本格的に取り組むことはなかった。

四、結語

サケをめぐる民俗は、北方民族との繋がりを想起させる対象である。この問題に大正の初期ぐらまでは関心を払つていた柳田は、その後十数年の民間伝承学成立に向けた理論化過程で、それが自分の学問にそぐわない対象であることを悟つたのである。そこでは中山太郎や佐々

木喜善などとの個人的なやりとりがあったが、根本的なところでサケの民俗が海外から入ってきた分析概念、学術用語で読み解かれることに危惧を抱いたのであった。そして、自国理論を構築するため

の海外理論排斥の題材として、サケの民俗は顧みられることがなかつたのである。北方文化とサケの緊密な関係を「鮭の肌」に嗅ぐのは流水に閉ざされた北の異族の国の匂いである(「谷川一九七五・一九九」と、谷川健一は表現した。しかし、柳田はサケに対し、自分のなすべき学問の行く末を、大きく左右するかもしれない危険な香りを嗅ぎ取つたのではなからうか。

「引用文献」
飯倉照平 一九七六「柳田国男南方熊楠往復書簡集」(平凡社)
柳田国男
一九三三「箱石と笈の塚(巫女考の八)」(郷土研究)一八(郷土研究社、川村香樹の名で)
一九二六「鮭と兄弟」と「郷土研究」四七(郷土研究社、山崎千束の名で)

年不詳「山島民謡集(二)」(未刊、なお本稿は定本二七によつた)
一九三〇「魚王行乞譚」改訂(改訂社、なお本稿は定本五によつた)
一九三二「狼と鍛冶屋の姥」(郷土研究)五五(郷土研究社、なお本稿は定本八によつた)
一九三三「忌と物忌の話」土の香(五〇)(なお本稿は定本二七によつた)
一九三五「遠野物語拾遺」(遠野物語再版増補版、郷土研究社、鈴木脩一編集、なお本稿は新潮文庫版(一九七三)によつた)
一九三六「猿地蔵考」(昔話研究)五三(三三社、なお本稿は定本六によつた)
吉原春園 一九二五「下総小見川の話」(郷土研究)三一(郷土研究社)
胡桃沢勘内 一九二六「鮭を忌む神」(郷土研究)四六

鉤鈔(かぎもり)

渡部 裕

(北海道立北方民族博物館)

はじめに

鉤鈔の基本的な形態は、釣針型の鉄製鉤と木製の柄およびそれらを繋ぐ短い紐

(郷土研究社、平瀬麦雨の名で)
羽柴雄輔 一九一六「オースケコースケ」(郷土研究)四六(郷土研究社)
中山太郎
一九一六「鮭神について」(郷土研究)四八(郷土研究社、岩井田作太郎の名で)
一九二四「氣多神考」(飛騨史壇)八三(なお本稿は「日本民俗学」、神事篇(一九三〇、大岡山書店)によつた)
田口松圃 一九一六「鮭神とエビス」(郷土研究)四八(郷土研究社)
平山和彦 一九七九「中山太郎」(日本民俗学のエッセンス)(ベリかん社)
佐伯有清 一九八八「柳田国男と古代史」(吉川弘文館)
佐々木喜善 一九三二「聴耳草紙」(三三社)
谷川健一 一九七五「神・人間・動物」(平凡社)

会員ニュース

相模原市立博物館 夏季特別展

「相模原が海だったころ」

—中津層・上総層と神奈川県下の化石—

相模原市南西部から愛川町にかけて相模川沿岸などには、今から約250万年前に堆積した「中津層群」が見られます。今回の特別展では、この中から発掘された化石を紹介します。あわせて神奈川県内外の様々な地域の地層に見られる化石も展示し、太古の相模原を感じてもらえる内容です。

期間 七月十八日(土)～八月三十日(日)

時間 午前九時三十分～午後五時

休館日 毎週月曜日(ただし七月二十日・

祝日は開館)と七月二十一日(火)

会場 相模原市立博物館特別展示室

観覧料 大人三〇〇円 小・中学生一〇〇円

問い合わせ 相模原市立博物館

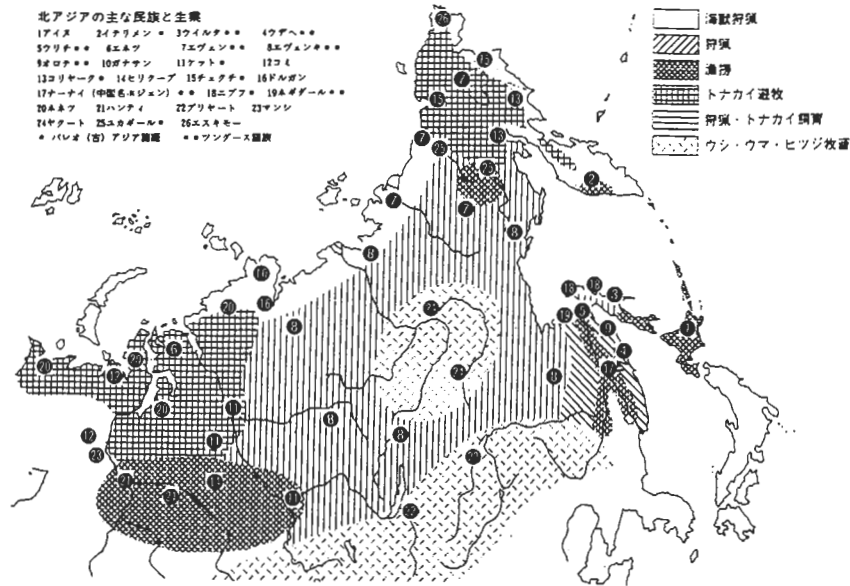
〒229-0021 相模原市相模原市高根3-1-15

電話 0427(50)8030

FAX 0427(50)8061

北アジアの主な民族と言葉

- 17アイヌ 24タタリ人 3ウイグル 4ウデヘ
- 5ウリチ 6エヌク 7エグムシ 8エグムシ
- 9ウロク 10ウラナシ 11アムル 12アムル
- 13コシヤク 14セリヤク 15チムク 16チムク
- 17チムク(中国系ウイグル) 18ニプフ 19ニプフ
- 20ニプフ 21ハンタイ 22アムル 23アムル
- 24チムク 25チムク 26チムク
- パレオ(古)アジア諸語 ●フンダース諸語



北海道立北方民族博物館について

当館は、北海道を含めた北方諸地域にくらす人びとの文化と歴史を研究し、展示をはじめ講座などをおして多くの方々に理解を深めていただくことを目的としています。

常設展示は民族ごとに完結する方法をとらず、衣・食・住・精神文化・生業などのテーマごとに共通する点や民族による違いを比較できるような構成になっています。資料は、網走市から寄贈されたアイヌ・ウイグル・ニプフなど北海道・サハリンの民族資料と考古資料のほか、アメリカ・カナダ・グリーンランド・ロシア・中国・北ヨーロッパの国々から収集した約5000点のなかから、900点ほどを展示しています。民族資料の大部分は19世紀後半から今世紀前半までに使用されていた「伝統的」なもので、一部復元的に制作された資料や現代の工芸品も含まれています。さらに、実物資料のみならず、映像や音声資料を活用し、人びとのいきいきとした生活の様子も紹介しています。

また、国指定史跡のモヨロ貝塚(網走市)をはじめとする遺跡から出土した資料をおして、大陸やサハリンと深いつながりを持ち、アイヌ文化の形成にも影響を与えたと考えられている「オホーツク文化」を紹介するコーナーもあります。

館内には図書やビデオを閲覧できる情報普及室もあり、また、特別展や講演会・シンポジウムなどの事業や、出版物の刊行、友の会などの普及活動も行っています。(齋藤玲子)

〒093-0042 網走市字潮見313-1 (道立オホーツク公園内) Tel.0152-45-3888 (1991年2月開館)

民具マンスリー 第31巻4号

1998年7月5日印刷

1998年7月10日発行

編集発行 神奈川大学日本常民文化研究所

発行所 神奈川大学
〒221-8686 横浜市神奈川区
六角橋3-27-1

☎045-481-5661代表

印刷所 神奈川新聞社出版局

振込口座 00290-8-13220

購読年会費 3500円/定価 350円